

# 釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 11

## ヴェーナスの恵み 鹿島釣狂

### 浜厚真港のクロガシラ

釣り新聞を見ていると、無性に釣りに行きたくなった。天気がいいのは今日一日だ。明日からはまた荒れるようだ。雪も積もるらしい。午後から出掛けるとしよう。前回の浜厚真漁港のハモ釣りは散々だった。海は大荒れで漁港の中に千切れた昆布が入り込み、幅広の日高昆布との格闘になったのだ。

10月31日、午後4時に浜厚真漁港に着き、4本の竿を出してカレイ仕掛を付けてすぐに釣り始めた。前回漁港内に敷き詰めるようにあった昆布は港から出て行ってしまったようだ。今日も風が強い。竿先が大きく揺れてアタリが分からないほどだ。そして、すぐに暗くなってきた。4本の竿をそれぞれ1投しただけで、アナゴ仕掛けに変えることになった。その内2本には、ロケット付きのものにアミエビを入れて投げ込んだ。

まずチビアブラコがかかった。風の所為もあるがアタリは全く分からなかった。続いてドンコも来たがアタリも分からずヌルーと上がってきた。そしてチビゾイ、これはアタリがはっきりと出た。

6時半、竿を食い込む明確なアタリだ。なかなかの手応えで取り込んだのはクロガシラ36cmだった。ロケットカゴ付きのものだった。そう言えば先ほどからロケットカゴ付きの仕掛にばかりアタリが出た。その距離に丁度かけ上がりがあるのか、投げ込んでから道糸を張っていると根掛かりしたようになっていたのだ。遠投したものはスルスルと抜けてきてオモリが落ち着かなかった。4本とも同じ距離に振り込んだ。

ひっきりなしに目の前を釣り人が通る。みんな疑似餌をつけた若者のルアーマンだ。明日は土曜日で天気が崩れる予報なので暗い内からやって来たらしい。9時頃、私の隣りに2名の投げ釣り師が入った。この時期アナゴがかかることは滅多になく、クロガシラ狙いなのだという。

そんなことを話していると、また竿先にフワフワするアタリが出た。風の悪戯ではない。

手に竿を持って道糸を張りぎみにしながら次のアタリを待っているとググググッと竿先が入った。待望のアナゴだろうか。しかし、アナゴ独特のフワッと軽くなるようなことはなく最後まで海底に突き刺さる。クロガシラだった。スケールを当てると38cmを指していた。

ホタテが釣れた。ハリ先がしっかりとホタテの殻の中に入っている。ホタテは何を食べているのだろうか。まさかイソメを食べようとしたわけではあるまい。プランクトンを体内に取り入れようとして帆を張った舟のように大きく貝を開いているところに異物を感じて貝の蓋を閉じてしまったのだろう。そもそもホタテに口はあるのだろうか。そう言えばホッキやアサリのような吸水管というものを見たことが無い。どうなのだろう。

そんな疑問を挟むこともないか。そもそも、ギリシャ神話に出てくる女神ビーナスはホタテ貝そのものから生まれたとする説があるそうだ。イタリアの画家サンドロ・ボッティチェリによる『ビーナスの誕生』ではホタテは豊穡の象徴としてビーナス（アフロディテ）が生まれたままの姿で貝殻に乗せて描かれている。



『ビーナスの誕生』 サンドロ・ボッティチェリ

その後、風も治まり、小さなアタリに反応することも出来るようになり、アブラコ、ソイ、クロガシラの小物を釣ることが出来た。しかし、当初の目的であるアナゴの姿を拝むことは出来なかった。この真夜中に釣り人たちが益々多くなってきたこともあり、海の豊穡の恵みはその人方に譲ることにして港を後にした。



本日の釣果

2時半に家に帰ると、玄関の下駄箱の上に大鍋が置いてある。まだ温かい。中を覗くと、ビーフシチューだった。ありがたい。腹を空かせて帰ってきた私のために用意しておいてくれたのだ。私が気付くようにと、玄関に置いてくれていたのだ。まずは風呂に入る。少しぬるかったなので、熱々のお湯に設定してコックを拵った。温まってビールをグイッとやる。ビーフシチューは肉もトロトロで旨かった。

次の朝、息子が眠っている私を叩き起こした。何があったというのだろう。「お父さん、ビーフシチュー食べたのでしょうか?」「ウン、旨かった。ありがとう」「あれは、僕が作ったんだよ」「そうか、気が利くな」「違う、違う。お父さんのためではなくて、今日、あのビーフシチューを持って行かなくてはならないんだ。友だち7人で、深川のマープのバンガローで泊まることになったんだ。それで、みんながそれぞれ食べるものを持ち寄ることにしたんだ。今日の1時に出来上がって、忘れないようにと玄関に置いておいたんだ。もう〜。作り終えて、しばらくするとお父さんが帰ってきたのは分かっていたのだけれど、まさか食べるとは思わなかった。」

そう言えば、誰も食べた形跡がなかったのだ。なんだか出来すぎているなという思いはあったのだけれど……。ホタテから生まれたヴィーナスの恵みとさえ思えたのだ。

次の日は、岩見沢市民文化祭の音楽発表会があり、私が所属する混声合唱団はイタリア歌曲で出演した。そう言えば『ヴィーナスの誕生』の作者サンドロ・ボッティチェッリ

はイタリアの画家だったか？

女性コーラス「アイリス」に所属している女房はミサ曲を歌っていた。そう言えばミサ曲もイタリア原語で歌うものだった。まさかその曲にまでビーナス（アフロディテ）が出てきたりしていて……。なんだかホタテ貝からの因縁めいたものを感じた。

## とんとん会

10月31日、「とんとん会」の最終大会に参加させてもらった。他会と言えどもみんな知った顔で気楽なものである。今日は風もなく波も1mと予報している。タカノハ釣りにはおもてこいだ。私は月寒で下りることにした。同じ思いだったのか矢根氏や西脇氏も一緒に下りた。

私は、最初の人家が見えたところから鉄橋下のトンネルを潜って前浜に出た。そこに一旦荷物を置いて、乳呑川方向に向かって散策した。思っていたよりも波が高くて、沖に適度な感じで根が連なっているのも見える。

今日は苦勞することもないだろう。斜めの護岸が続きのんびりと腰を下ろしながら釣りができるところで竿を設置した。他より深いのか、ここだけ波も落ち着いている。月寒川で下りた矢根氏が先に竿を出していた。大物釣り師の先輩が居ると何かと心強い。

しかし、アタリが全く出ない。たまにチョコンチョコンと竿を揺らすのはハゴトコのみである。まあ、焦る必要もないか。今日は朝方に満潮を迎える乗っ込み時間帯を狙ってのタカノハ釣りなのだから。矢根氏も同じようだった。しかし、タカノハは駄目でもカジカの1本ぐらいは来るだろうと思っていたが、満潮時間帯になっても全く大物のアタリは出なかった。矢根氏は諦めてしまったのか、月寒川の方へと移動していった。私も少しずつ根の見える方へと矢根氏とは反対方向に向かって移動していったがアタリはついぞ出なかった。

締め切り時間を迎えてしまった。今日は私にヴィーナスからの恵みはなかった。しかし、審査ではけっこうな大物が上がっていた。総合優勝は浜荻伏で大物カジカをゴロッと揃えた荻野一利氏だった。身長優勝はこれも浜荻伏で52.5cmのアブラコを釣りあげた片岡浩氏だった。帰りに三石温泉で1年の締めくくりとする疲れを癒したが、私にとっては癒すどころではなく、次の岩見沢釣遊会最終大会に向けての作戦を再構築する湯となった。





身長優勝 片岡 浩氏 アブラコ 52.5 cm



総合優勝 荻野一利氏

## タカノハに捧げる歓喜の雄叫び

11月15日、岩見沢釣遊会第7回大会が厚賀港～三石港で開催された。私は、第一候補に厚賀港右を予定していた。以前、厚賀港でタカノハ釣りをしていたときに、前浜で昆布取りの舟が集結していて、隣の釣り人が、「あそこは秋にカジカが揃うところだ。」と教えてくれたのだ。昨年、そこに入ろうとしたら、既にたくさんの釣り人が竿を出していたので断念していたのだ。

第2候補に春立海岸を予定していた。今回は潮回りが大変良い。着いたときが最干潮で2時間ほど岩盤の先に出て釣りをすることが出来るだろう。立ち込み用三脚を使えば3時間は堅いだろう。以前、同じような条件下で太ったカジカと50cmオーバーのアブラコを揃えて1600点台の大釣りをしたことがあるのだ。

そんな時、電話が鳴った。前野氏からだ。「どこに入るか決まったか？もし良かったら大狩部に行かないか？最後なので焼肉でもやりながらのんびりと釣りしないか。下見もしてきており嵐氏も一緒だぞ。」

前野氏と嵐氏は、年間優勝のデットヒートを繰り返してきて、現在同点で並んでいたはずだ。こんなことでいいのだろうか？しかも同じ釣り場で二人並んで結着をつけようというのだ。そんなところへ割り込んでもいいのだろうか。疑問に思いながらも一応、大狩部も予定に入れておいた。

本日の天気は雨で、波も3mと予報している。春立や厚賀は厳しいことが予想される。バスの中でほぼ大狩部と気持ちを定めて、途中のコンビニで焼肉を調達した。炭火を熾しながら二人の審判を買ってでるのもいいだろう。

厚賀港で着替えをした。賀張川まで続く防潮堤には、竿先に付けるギョギョライトの光が見えない。釣り人は誰もいないのだ。波もさほど心配したほどでもない。一度お誘いを受けたことを翻すことになることと、年間優勝に絡む二人の鏝迫り合いを観戦することは出来ないが、急遽、ここで下りることにした。

厚賀漁港右から続く防潮堤の前浜は、潮が引いて砂浜が出ていた。防潮堤からは幾つか梯子が掛けられて下りていくことが出来そうだ。その梯子を使わせてもらった。きめの細かい泥のような黒い砂浜だ。春立用にと準備した立ち込み用三脚を立て掛けたので竿が砂まみれになる心配はない。まだ、午後10時だった。

早速、イカゴロ天秤ネット仕掛をドボン、ドボンと振り込んだ。すぐに35cmほどのカジカがイカゴロに食いついてきた。30cmほどのハゴトコも来た。ゴンゴンというアタリで先ほどと似たようなカジカがきた。幸先がよいようだ。

釣り始めてから1時間ばかりしたときだった。クインクインとしたアタリが出て、道糸が大きくふけた。ふけた道糸を張っていくと、グイーンと竿が伸された。竿を大きく煽るとズシッとした重みが乗った。竿を立てて懸命にリールを巻き、グングンと竿先が刺さり込むのをいなしながらやりとりした。先ほど根掛かりがあって仕掛を失っていたこともあるが無理は出来ない。慎重に寄せてくると、波打ち際に大きな菱形の塊が打ち上がった。後退りしながら更に波の来ないところまで引き摺った。バタンバタンと鱗を打ち白い腹も見える。タカノハだ。鮫肌の中側がザラリとした感触で、腹側は全くシミのない天然物を思わせるものだった。



バナメイエビに食いついてきた

嬉しさが心の底から込み上げてきてしばらく茫然と立ち尽くしてしまった。手製のハリ外し棒をタカノハの口に突っ込み、クルクルッと回そうとしたが、簡単に回らない。ハリスが切れてもいいと力を入れてグルグルッと回すと外れた。夜光赤玉とバナメイエビのエサだった。

これは、今日の大会に向けて、ビックハウスで酒のつまみや何かよいエサはないかと物色していると、北海道釣名人会の森田正実氏に出会い、今日のように荒れて濁った海水では、シロ貝のような白いエサが効果を発揮するのだと教授を受けたのだ。あいにくシロ貝は置いていなくて、生協に向かったがここでも無い。エサになるような白いものを見回していると剥き身のバナメイエビが目にとまったのだ。

その後はしばらくハゴトコのアタリばかりが続いた。潮も混んできてそろそろ防潮堤の上に上がろうかと思っていると、釣り人がやって来て防潮堤の上から声を掛けてきた。賀張川に向かったはずの仲間の吉井氏だった。大狩部で下りると言っていた私が、ここで竿を出しているとは思っても寄らなかったようで、「どうだ？」と聞くので、得意げに釣り上げたタカノハを高く掲げて「どうだ！」と返した。吉井氏の方はあまり芳しくなく、釣り場を捜して移動してきたようだった。

吉井氏に竿を引っ張り上げてもらって、自分も梯子を登って防潮堤の上に上がった。まだ、午前2時だった。更に大物が食いついてくるかも知れないとテトラの入っていないところを探し出して竿を設置した。私は、念のため、タモ網を外した振出式柄の先に大きい錨バリを付けた3m程の太糸を結んで、防潮堤に立て掛けた。私の竿では先ほどのような大物タカノハを防潮堤の上まで上げる自信がなかったのだ。隣りに吉井氏が並んだ。大物



が掛かったときは二人で協力して取り込もうと話合った。

風が出てきて、雨も大粒になってきた。間断なく降り続く雨に晒されている内に、ウェーダーの中にまで水が染みてきた。先日、穴の開いたウェーダーの足先を修理したばかりだったのだが、ズボンの部分全体にひび割れが出来ているらしい。合羽のフードにバチバチと雨が当たって、耳鳴りがしてきた。染みた程度だった雨水が、中にはいたジャージや股引を濡らし、靴下までグチョグチョになってきた。

眠気もさしてきて生欠伸が連続するようになり、腰を下ろして休みたくなった。背後に簡易トイレがあった。仕掛を回収し、まずはそのトイレに避難してみた。しかし、簡易トイレでもあり便槽の中が丸見えだ。焦げ茶色の長いものが折り重なって見える。臭いはしないのだが、気持ち悪くなってくる。人家のあるところまで800m程を歩いた。軒先が出て雨風の当たらない側で、腰を下ろした。少し眠ったらしい。ふっと気がつくともまだ、20分も経っていなかった。しかし、随分と楽になった。

もう一度、釣り場に戻って何度か竿を振り込んだが、獲物はハゴトコばかりで、大きなアタリはこれも大きなドンコだけだった。電話がかかってくる。会長からで早上がりしないかというものだった。現在、8:30。もういいだろう。会員みんなに連絡をとる。誰もが、この雨の中ウンザリしていたようで、すぐに了解となる。バスは新冠道の駅から8:50出発。新冠判官館から先は誰も行かなかったようだ。皆さんこの界限で釣りをしていたようである。

清島駅前を審査した。無人駅だが現在は日高線不通のため使われていない。駅舎の中を使うのは、はばかれるので、住民に断ってから町営住宅の自転車小屋を使って審査した。カジカがゴロゴロと出てくる。しかし、嫁さんはハゴトコのようなようだ。岡氏が唯一アブラコを持ってきていた。私のバツカンが開けられた。ウオウというため息が聞こえた。その時は鼻高々なのである。審査の結果私がダントツの優勝だった。タカノハは岩見沢釣遊会歴代大物のトップに君臨する58.2cmと記録された。海の女神アフロディテは最後の最後に私に微笑んでくれたのだ。

現在、年間トップを走る嵐氏が魚を出した。カジカを揃え嫁はハゴトコ27.3cmと記録された。同点で走る前野氏が大物カジカを揃えて出した。重量は僅かに嵐氏を超えている。しかし、嫁が小さい。審査規定ぎりぎりの20cmで通過した。それでもって、年間優勝は嵐氏がものにした。年間準優勝は前野氏。

さて、さて。年間の3位、4位、5位である。私を含めて3名が同点で並んでしまったのだ。岩見沢釣遊会規定では「年間総合順位は7回大会の内、5回の順位点の総計で決める。同点者が出た場合は6回の点数が少ない方を上位とする」とある。なんと私が6回目の僅かな差で年間3位となったのだ。どんでん返しの3位入賞である。春から年間7、8位と低迷が続いていたが、第6回、第7回と連続して優勝できたことが順位点を底上げしてくれたのだ。「こいつは秋のみ縁起がいいワイ」



審査提出魚（タカノハ1、カジカ2、ハゴトコ2）

正午前には帰宅した。女房は不思議そうな顔で迎えてくれた。いつもは午後4時頃のご帰還と相成っていたのだが、今日に限って昼前の帰宅なのだ。9時上がりのため予約していた「いずみ食堂」は開店しておらず、予約をキャンセルしてそのまま岩見沢に向かったのだ。

そこで、女房に予約されていたタカノハのご開陳となる。今までにない大物に感嘆の声を漏らすのを聞き逃さなかった。代は満足である。タカノハは刺身にした。醤油ダレに脂が浮いた。カジカは潮汁である。タカノハの頭と骨は生ゴミに捨ててしまった。これも一緒に入れるべきだったか。

刺身があまりにも多くて、今週末に義父の1周忌の法要のために帰ってくる娘夫婦のために、2つの柵を冷凍にした。娘の大好きな縁側も全て冷凍にした。

次の日、何を思ったか息子がカルパッチョをつくると言い出した。女房にシチューの要望を出し、自分はカルパッチョをつくると言うのだ。絶品だった。タカノハの柵を薄切りにして、各種野菜、にんにく、メンミ、胡椒、マヨネーズ等で和えたものだった。



腹面はシミもなく全くの天然物と思われる



この厳つい顔を見よ





5枚下ろしにした。これに刺身を盛りつけて完成



これだけの柵がとれた